

D・H・ローレンス

恋する女たち 見本版

Women in Love

郷 尚文 訳

郷 尚文

東京外国語大学卒業後、海外営業職ほかを経てフリーランスの翻訳者となる。一九八八年にグルジェフの主著『ベルゼバブが孫に語った物語』の翻訳を開始し、以後、グルジェフに発する伝達の流れにくみする複数のグループおよび個人と接触をもつ。一九八九年にインドの Osho Commune International を訪れた後、グルジェフに由来する舞踏・体操・エクササイズを集めた「ムーヴメンツ」をめぐる同コミュニティでの試みに関与。一九九七年よりムーヴメンツを中心とするプログラムを日本および海外で主導。二〇〇一年に『覚醒の舞踏と創造と進化の図絵』（市民出版社）を発表。二〇一四年にグルジェフ全集、二〇一七年にグルジェフ総論シリーズの発行を開始。二〇二二年、キャサリン・マンスフィールドの生涯と作品を取り上げた『グルジェフ総論・メソテリック』を発表し、続けて新しい翻訳によるマンスフィールド作品集（全六巻）を発行。二〇二四年から新しい翻訳によるD・H・ローレンスの作品の発行も開始。

<http://gurdjeff.la.coocan.jp/>

目次

上巻

この作品について

3

付録・解説	189
◎『虹』第一章…物語の始まり	189
◎エニアグラムを使った読解	191
出版目録	203

第一章 姉妹

13

第二章 ショートランズ

25

第三章 教室

34

第四章 ダイバー

43

第五章 汽車のなかで

49

第六章 クレム・ドウ・メント

56

第七章 フェティッシュ

68

第八章 ブレッドルビー

72

第九章 炭塵

93

第十章 スケッチブック

100

第十一章 島

103

第十二章 しつらえ

112

第十三章 ミノ

120

第十四章 水上の宴

129

第十五章 日曜の夜

156

第十六章 男同士

162

第十七章 産業王

172

この作品について

『虹』（一九一五年）と『恋する女たち』（一九二〇年）を合わせたブラングウェン家の物語は、標準的な単行本だと八百ページ十千ページほどになるD・H・ローレンスの生涯で最大の作品である。両著は旧約聖書と新約聖書の関係にある。『虹』を先に読むことは必須ではないが、多少のことは知っておくと読みが深まる。全体の主題を提示するとともに名文として知られる『虹』の冒頭の部分を巻末の付録に収めた。まずはそれを読むことが望まれる。

『虹』は、旧約聖書と同じく、全知の視点からの叙事的な記述を主体とし、語り手は自身の立場を明らかにしないので、いろいろな解釈がありうる。しかし、内容を要約するとなると、解釈なしで済まされない。「虹」という題名は、ノアの物語との関係で、希望をあらわす。それをどう受け取るかでも、解釈が分かれる。どのような側面に着目し、どのような視点から、どのように解釈するかは、かなりのところまで読者に任されており、ここに示すのは一例である。

ブラングウェン家の家系図を下に示す。トム・ブラングウェンとリディアの関係は、ローレンスの父母の関係をなぞっている。アースラは、ドイツの男爵家の娘でローレンスが指導を受けた教授の妻で三人の子がいたが一九一二年にローレンスと駆け落ちしたフリーダをモデルにしたとされる。

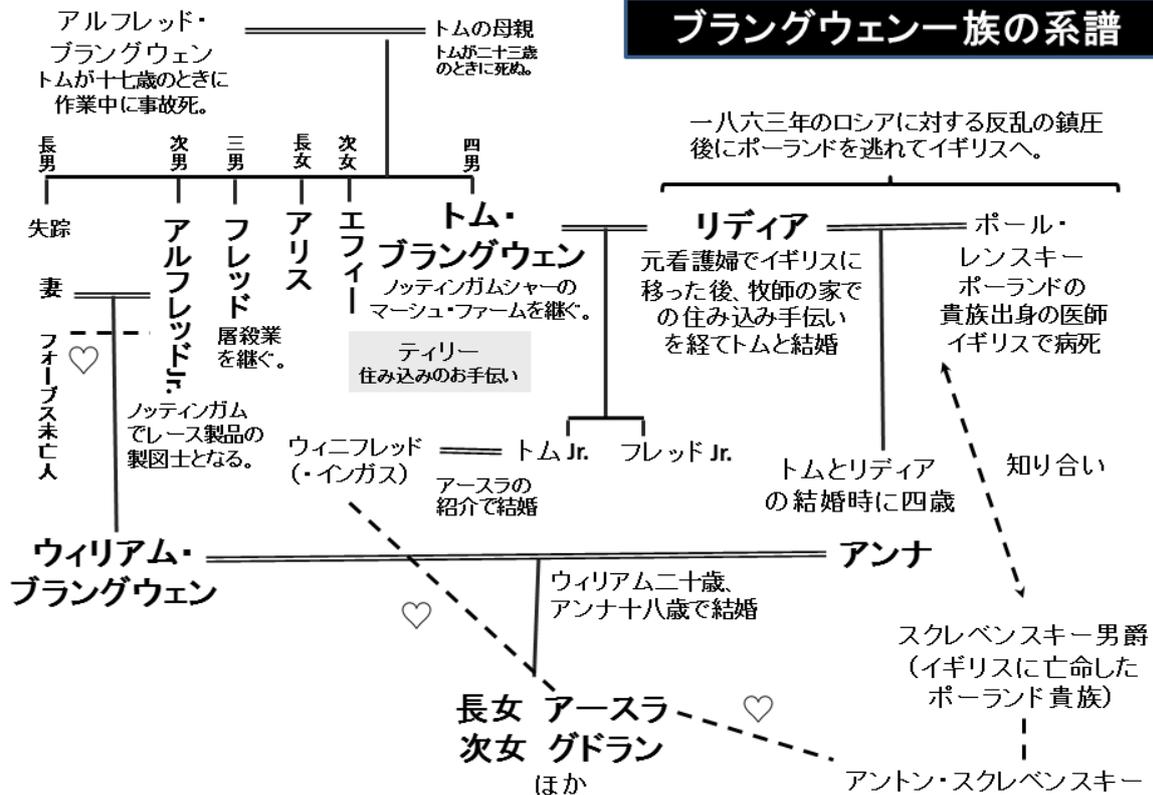


カリスマ的な炭鉱夫の父と、上流階級の出身だが経済的に苦境にあった母



ローレンスとフリーダ

ブラングウェン一族の系譜



そもそもノアとはどんな人物だったのか。産めよ殖やせよの神による理不尽な集団虐殺のもくろみで言われるままに行動し、その始末がついた後、自分が保護した動物の一部を殺して焼いた匂いを天に昇らせ、神を喜ばせようとした。そのこうばしい匂いを嗅いだ神は、ああ洪水で生き物を皆殺しにするなんてことはもうするまいと思ひ、その約束の印として、空に虹を出現させたと記されている。いったいこれってどんな神様？ その後のノアには、選ばれた動物の保護者、つがいの守り手といった一面もあり、いまの人類の父祖らしいが、晩年には、酔って裸になり、露出した性器を衣で隠してくれと子を呪ったことが記されている。控えめに言っても、トッブダウンの流れとボトムアップの流れの合間でジレンマに陥った人物、物語で後から描写される男というジェンダーをめぐる混乱の起源となった人物と見える。



ノアの醜態
Giovanni Bellini (c.1515)

最初に語られるのは、マーシユ・ファームで二十八歳まで独り身を貫いたトム・ブラングウェンが、ポーランドの貴族出身の六歳年上の未亡人リディアに求婚し、結婚する話である。貴族出身の医師で一八六三年のポーランド反乱に関与した夫とともに、ロシアによって反乱が鎮圧された後、リディアは教会の保護を受けてイギリスに渡り、夫が病死した後は、娘のアンナを連れて、マーシユ・ファームの近くの牧師の家で住み込みの手伝いをしていた。

トムは強い性欲の持ち主ながら、商売女から誘われての最初の性体験で苦い思いをしたことから性欲の扱いに慎重になり、二十八歳まで女中のティリーと二人暮らしをしていたが、リディアに対して運命的なものを感じ、また性を深く知り、他性としての女の交わりを経ることなしには、おのれの存在は無に等しいものとして終わるとの自覚から、ある晩、思い立って求婚し、承諾を得る。このあたりは物語全体でもっとも感動的な場面のひとつである。

トムにはノアの面影がある。男と女の間で起こりうることの背後に創造の意図を認め、独り身であつてはおのれの生は成就されえないことをわきまえての決然とした求婚、強い性欲の持ち主ながらその扱いをめぐる自覚ある態度、動物を育てつがわせ殺すなりわいに由来する諦観、それと結び付いた宗教的確信が、男の原型をほうふつとさせる。

しかし、トムは子供時代から、自分の頭の働きに制約が課されていることを思い知らされてきた。能動的に頭を使うことができない、特定の物事に関する自分の意見や判断をまとめることができない。また、ノアのように酒浸りとなった。最後にはなんとファームを襲った洪水で死ぬが、それでも妻のリディアは彼について、自分を知ることと魂の救いを得た、自分の一番目の夫はけっしてそんなふうではなかったと語る。

〈ウィリアム・ブラングウェン…授かりものからの災厄〉

次に語られるのは、リディアの連れ子であるアンナと、彼女と結婚したト

ムの甥ウィリアムのことである。トムはウィリアムを好まず、この男とくつくことでアンナがどれほどのものを失うかを思わずにいらなかったが、ふたりが鶏小屋で抱き合うのを目にするなどした後、もうどうにもなるまいとあきらめ、ふたりの未来が暗いことを予見しながらも、ふたりの結婚を認め、カネを与えたり、家を用意したりの心遣いを見せる。ウィリアム二十歳、アンナ十八歳のときのことである。

そうしてもらった二千五百ポンド（現在の七千五百万円相当）に加え、若い二人の旺盛な性欲という、これまた天からの授かりものの消費からの大満足が、血こそつながっていないが従兄弟との結婚というこれまた父親が誘因となった関係からのしっぺ返しとあいまって、ふたりの関係の性格を定めたと見える。

ふたりはトムが用意してくれた教会脇のコテージに長々と引きこもり、性の満足の追求にふける。そのコテージのなかの描写がどうも箱舟のなかを意識しているようである。そして妊娠後のある日、月の影響下でアンナは興奮し、素っ裸で〈子宮踊り〉をしているところに、夫が帰ってきたので、見てちょうだいと、夫にもそれを披露するが、夫はその妖しさに、容易に立ち直れないほどの衝撃を受ける。生まれたのは女の子で、アースラと名付けられた。アンナは続けて妊娠し、次に生まれたのも女の子で、グドランと名付けられた。

このころから、夫婦仲が陰悪になっていき、ふたりは子作りと子育てだけで結び付いたようなありさまとなる。ブラングウェン一族のなかには、教育や経験で育つ世間的な頭の働きとは違う、形象の認識や造形と結び付いた頭の働きにすぐれ、工芸をなりわいとする男がたまにあらわれ、夫のウィリアムはそのひとりで、最初は薄馬鹿と思われるにあらわれ、夫のウィリアムはそのひとりで、最初は薄馬鹿と思われるにあらわれ、夫のウィリアムはそうした頭の働きの持ち主であることがやがてわかる。ウィリアムは、レース製品のデザイナーとして働くかたわら、自宅の作業場で工芸に打ち込み、宗教・芸術・美術における独自の感受性と才能を満足させ、地元で子どもたちにこれを教えたりするようにもなる。

妻のアンナはこれを軽侮し、工芸に打ち込む夫にミシンで対抗、というの

はつまり、夜遅くに夢中になってミシンを動かすことで夫にいやがらせをするのである。『恋する女たち』の冒頭でのアースラが縫い物をする傍らでグドランがスケッチをする場面は平穩に見えるが、両親の間でのこうしたことがその背景にある。後の世代は前の世代の関係の図式を踏襲し、それを後述する「センター」の働かせかたのパターンとして各自の内側でも再現させる。アンナは、もつと社会に認められた知識や教育を子供に身に付けさせることにこだわりつつ、ほとんどの関心を次から次への子作りと子育てに向けるようになる。〈中和の力〉を宿したものの大量消費からの、〈中和の力〉を大量に宿したものの大量生産。仕入れたものがあらかたもらいものでは、出てきたものも自分のものとならない。

アンナはウィリアムとのなれそめの時期には宗教の神秘に対する彼の興味と知識に感心していたが、結婚後は、こうしたことへの彼ののめり込みの身が伴わない抽象的性格、自己中心的もしくは自慰的な性格に幻滅し、これを軽侮するようになった。義父のトムが備えていた身の伴った宗教性との落差が大きすぎたとも見える。

〈アースラ…性・ジェンダーと自立をめぐる混乱〉

『虹』の後半は、もっぱらアースラの物語である。その生い立ち、父母への反発、性をめぐる混乱、自立に向けての格闘のなかでいっそう深まる自己喪失が語られる。彼女は十六歳にしてアントン・スケレブンスキーと恋をする。彼はどうかやら両親をなくした後にアンナの友人のスケレブンスキー男爵の保護下で軍人となった青年のようで、休暇中に遊びにきたときに恋が芽生えた。ABまではふたりとも夢心地だったが、アフリカへの派兵を前にした数回に分けての休暇の終わり近く、月の影響下でアースラは、母アンナの〈子宮踊り〉を思わせるやりかたでアントンに迫り、彼は応えようとするも、心に傷を負い、気まずい関係となる。

実際のところ、何がどうなったのか、記述から判断するのが難しく、読解上の挑戦となっている。『創世記』によるとかつて地上にいたという〈神の子〉、

アースラの解釈によればアダムの子孫であるふつうの男とは違ったタイプの男に誘われたいというアースラの願望は何なのか？ これはアースラの父のウィリアムがこだわった「アダムからのイヴの創造」の話と関係しているのか？ ウィリアムは、アンナとの結婚後に、これを主題としたレリーフの制作に取りかかり、これは彼にとって初めての大作となるはずだったが、アンナからの軽侮を受けて、ある日、これを焼き捨てる。これが夫婦の関係が大きく変わっていく前触れとなった。

神はアダムからイヴを創るより前、それとは別に女らしきものを創ってみただしいが、能動・受動の配分が思いのほか難しく、アダムとうまく合わせられなかった。リリスをめぐるこの源流には、『恋する女たち』で言及されるアッシリアのキュベレー、メソポタミアのリリトウ、バーニーがあると思われる。それならたぶん、神はアダムの前に男らしきものを創っていても、それが『創世記』で「神の子」として言及された男たちだと、アースラは想像したようである。この別種の男たちは、アダムの子孫の男たちとは、能動・受動の配分が異なるのか？ この話は『恋する女たち』に持ち越される。



アダムからのイヴの創造
ヴェロネーゼ画(十六世紀)



リリス
ジョン・コリア画
(一八九二年)



バーニー

アントン・スクレベンスキーはボーア戦争でアフリカに派兵され、前述のことからの気まずさのほか、国のために戦うということをめぐる議論もあつ

て、アースラは、彼との関係は終わったと見なす。その直後から、アースラは、学校でインガスという名前の女の先生のアスレチックな体に魅力を感じるようになり、プールでの水泳の授業で水着姿で並んで泳ぎ、軽く体を抱きしめてもらったりして大興奮、たまたまなくなってラブレターを出す。それからアースラは先生からコテージに誘われ、女権運動の熱心な支持者だった先生との裸の関係が始まるが、やがてアースラは先生の体にげんりするようになり、関係は長続きしなかった。

アースラは六年後にイギリスに戻ってきたアントン・スクレベンスキーと再会し、彼は初めて会ったときの彼ではないという印象を強くする。両親をなくした若い軍人であるアントンに六年前に初めて会ったとき、アースラの心を動かしたのは、彼のなかにあるように思えた「自発的な単独性」だったが、六年前に何回かに分けて時間を共にしたときにもう、彼がだんだん変わっていくのをアースラは感じていた。

親や社会が子供に押し付けようとするトップダウンの論理に従おうとする衝動と、物語中では草木の伸びゆく力にたとえられるボトムアップの論理に従おうとする衝動が拮抗し、男らしさをめぐる混乱が生じる。六年を経てアフリカの戦場から帰ってきたアントンにおいて、これに伴う性格の変化は決定的なものとなっていたと見える。



女たちは男たちに言う。
「行ってちょうだい！」

これに対するアースラの反応が興味深い。彼女はこの変化に気づきながら、それをあえて無視し、昔とすっかり同じだねと確認を求めるアントンに、そ

うではないとわかっていながらそうだねと言う。そしてもちろんこの変化を残念に思いながらも、性がからんだ本能的な部分では、ここの変化に興奮しているようでもある。あああんだ、魂のない軍人さんになっちゃったのね、だれだこういう軍人さんってすてき、というよつな反応である。このように、男というジェンダーをめぐる混乱は、男の側にも女の側にも生じ、それが陰と陰の間での秘密めいた引つ張り合いとなったようで、彼は暗闇の化身、闇の体がすてき、闇が闇と出会うの、といった言葉でこれが美化されるが、その先の展開を見ると、どうもアースラ、これでさんざん楽しませてもらったあげく、だれだあんだ魂ないじゃない、じつは男と違うじゃないということ

で彼を責め、ほとんど破滅させたようである。
ふたりはこうして関係を復活させ、調子に乗ってパリ、ローマへと、事前のハナムーンに行き、そのあたりで関係がぎくしゃくしてきていたのを無視して婚約するが、案の定、またもや六年前と同じようなことになり、今度はもう破滅的だった。アントンは一刻も早くこんなことの記憶を自分のなかから消し去るべく、アースラには言わずに大急ぎで大尉の娘と結婚し、インドに赴任する。

それからアースラは妊娠に気づき、子宮に思考を乗っ取られたようになり、お母さんごめんさい、あなたは女の鏡です、やっぱり女は子供と家庭のために生きるのが幸せなのねと、すっかり改心した気になった後、アントンの赴任先に手紙を書く。アントン、許してちょうだい、私は自分の変な欲望をあなたにぶつけた、私は心を入れ替えて、いい奥さんになりますから、ぜひ結婚して家庭を持ちましょう、これは私の本心です、嘘じゃありません、神様の前で宣誓します、あなたのアースラより。これに対し、ぼくはもう結婚したんだけどという電報を受け取り、アースラはとたんに鬼のようになつて激怒する。それからしばらくたった秋の雨の日、いたたまれなくなつて家を出て、林のなかをさまようなか、彼女は馬に蹴られ、長く寝込んだ後に流産する。やがて回復し、窓の外には春のきざし、空に大きな虹があらわれた。それを見て、自分は生まれ変わる、未来は明るいと、彼女は信じる。

◎『恋する女たち』の新展開

『恋する女たち』は、たぶんそれから五年を経た一九一一年の春から冬までの物語で、ブラングウェン家の長女アースラと次女グドランが、それぞれルパート・バーキンとジェラルド・クリッチという対照的な性格の男との間に結ぶ関係を軸として話が展開する。おもな舞台は、ブラングウェン家のあるベルドローヴァー、その近くの湖であるウィリー・ウオーター、ノッティンガム、ロンドン。物語の終盤で四人は大陸に渡り、チロル山中に行き着く。

これら主要な四人の登場人物のうち、アースラ(♥)は、前述のとおり、『虹』の後半からの登場人物で、一九一四年には前の夫との離婚を成立させてローレンスと結婚したフリーダがモデルとなっている。物語の筋をなぞるように、ローレンスとフリーダは、第一次世界大戦後、人が別に服なんか着なくてもいい裸の王国、もしくはローレンスの考えに共鳴する二十人ばかりがコミュニケーションを形成して暮らしている場所を求めて、世界を回るたびに出た。

ルパート・バーキン(♣)は、口にする教えや、アースラとの関係に関するかぎり、あきらかにローレンスの分身だが、性格に関しては、マンスフィールドの同棲相手の雑誌発行人・執筆家で、牧師になることを考えていたこともあるキリスト教者にして、ローレンスが自分の影響下に置きたがったジョン・ミドルトン・マリーの姿をだぶらせたと思える。ローレンスとマリーは、人にあれこれ教えを説きたがる傾向が似ているが、マリーのほうが人当たりがよくて、ローレンスのように悪漢めいたところがない。人におもねってこびを売るようなところが耐えられないと女二人に言われてしまうバーキンの性格の一面は、ローレンスよりもマリーを思わせる。

ジェラルド・クリッチ(♠)も、基本的にはローレンスの分身で、炭鉱夫の父から引き継ぎ、フリーダに対する暴力などであらわになった、粗野で凶暴で理不尽ながら魅力的でもある性格の一面をあらわしていると思われるが、その名前や一部の属性は、同名の実在の人物から借りたものであり、実在のクリッチ一族はこの勝手な借用のことでいまだにローレンスを許していない。グドラン(♦)は、キャサリン・マンスフィールドをモデルにしている。

マンスフィールドに関しては彼女が書いたものが豊富にあるので、それらに照らして、グドランが見事にマンスフィールドの特質をとらえていることを確認できる。グドランも、『虹』の後半からの登場人物だが、そちらではほとんど取り上げられず、たまに描写されるその姿もさえないので、実質的には『恋する女たち』での新しい登場人物である。

現実の世界ではマリーがマンスフィールドのパートナーだったが、物語のなかでのジェラルドとグドランの関係は、マリーとマンスフィールドの関係を再現しているように見えない。それよりむしろ、カッパルではなかったものの、対照的な意識と性格の持ち主だったローレンスとマンスフィールドの間での果たし合いに似た関係を思わせる。マリーによれば、一九一九年、イタリアのカプリで『恋する女たち』を執筆中のローレンスから、マンスフィールドは、おまえなんか死んでしまえという内容の手紙を受け取った。フリーダと違ってすぐに肉体的な暴力を及ぼせる相手ではなかったので、かえって激情をつのらせたところがあるだろう。物語中でのグドランの描写のなかには、マンスフィールドに対するローレンスの敵意と見えるものもうかがわれるが、彼女に対する一種の崇敬のようなものがそれにまさっている。ただし、これとは別に、物語のなかでバーキンがジェラルドに期待する男同士の絆という文脈では、バーキンはローレンス、ジェラルドはジョン・ミドルトン・マリーに相当する。

ここで名前を挙げた四人、すなわち、D・H・ローレンス、フリーダ、キヤサリン・マンスフィールド、ジョン・ミドルトン・マリーの間での波乱に満ちた関係や実際に起きたことを下敷きにしているゆえに、『恋する女たち』は、ローレンスの作品のなかで特別なものであり、その内容は彼がふつうの条件下で許容したであろう範囲を越えている。そんな状況をローレンスにもたらしたのはマンスフィールドだった。グドランが故郷に帰ってくるところで物語が始まり、彼女が去るところで物語は終わる。そして、最初の一撃は私から、最後の一撃も私からという、グドランの言葉。それにはそんな背景がある。

一九一三年、駆け落ち後に国外逃亡中のローレンスとフリーダにマンスフ

フィールドが手紙を書き、その後、マンスフィールドとマリーは、やがてイギリスに戻ってきたふたりとつきあいだし、大戦中にはコーンウォールの隔離した環境で四人は激しく関わり合うようになった。ローレンスから迫られたマリーにとっては激しすぎたようで、「ローレンスをわかることは自分がわからなくなることだ」という名言をもって逃げ腰になり、フリーダは体力で乗り切り、マンスフィールドとローレンスは対立するも、いずれもそれを創作の原動力とした。『恋する女たち』はその果敢なグループワークからローレンスがいれば男のメンツを犠牲にしてつかみ取ったことの中身をうかがわせている。



ローレンス、フリーダ、
マンスフィールド、マリー
(コーンウォールのコテージで)



ローレンスとマリーの裸のつきあい
映画『Priest of Love』(1983)より

『カラマーゾフ』的な展開、ジェンダーとセンター、エニアグラム

『虹』が旧約聖書とすると、『恋する女たち』は新約聖書に相当する。というのは、旧約の神のやりたい放題、トップダウンの創造の理不尽、それに従属した生命と性のありかたからの解放が、その基本的な方向性ということながら、それをどうとらえるかは、四人の間で大きく異なる。それを反映した互いのやりとり、関係のありかた、そのダイナミックな変化と、その後の行

き詰まり、打開を求めての動き、待ち受けていたように訪れるアクシデントやハザードの生々しい描写が、『恋する女たち』の魅力である。

『虹』とはまったく異なるこのような物語の構築は、ジョン・ミドルトン・マリーがイギリスへのその紹介で一役を果たしたドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』にならったものである。

『カラマゾフの兄弟』では、三兄弟が、頭・体・心の働きの重みに応じた人間の三類型をあらわす。そして、父殺しという主題との関係で、自己認識と世界認識が大幅に異なる三兄弟の間であったことを描写することにより、トップダウンの論理とボトムアップの論理の拮抗をめぐる秘密を浮き彫りにするようやりかたで、物語を展開させている。『恋する女たち』で、ローレンスは、ジェンダーの問題を正面から取り上げ、二組の男女を組み合わせた構図を採用することで、これと同じかそれ以上のことを試みた。

頭・体・心といった人のなかにある特定の働きの中心のことを「センター」というのは、マンズフィールドがその生涯の終わりにかけて身を寄せたグルジェフに由来する言いかただとふう思われている。人のなかに三つまたはそれ以上あって、人がその働きをほとんど自分そのものと見なして同一化するような「中心」ということである。そのいずれを自分と見なすか、思い込むかで、人の基本的な方向性が決まる。グルジェフはその著作と講話のなかで、これこそが見せる多様性の根本にあるものであることを指摘した（*）。

*グルジェフ『ベルゼバブが孫に語った物語』第四十八章に引用の講話「法則の結果にすぎないものとしての人間の行為や反応の多様性」

ローレンスも『恋する女たち』からこの言葉を使いだした。そしてここで特筆すべきは、人がどのセンターの働きに自分を同一化しやすく、どのセンターがどのセンターを圧倒しがちか、というようなことに関して、男と女の間での傾向の違いに着目したことである。これはもちろん、その気になれば簡単に観察しうることであるばかりか、だれにとっても大事なことで、グル

ジェフ自身はこれをめぐるいろいろな洞察を残している。

しかし、グルジェフの考えの英米での普及で一役を果たしたうえでグルジェフから次々に離反したマ・ロ・ウス・ペンズキー、ユング系心理学者モーリス・ニコル、雑誌発行者A・R・オラージュといった男たちは、この方面でのことに目を向けることへのイギリス社会のタブーに強く縛られ、自分の夫婦関係や男女関係を含めた視点からこの問題を取り上げる用意に欠けていたので、こうした男たちによるグルジェフに由来する考えの伝達の過程では、この方面での追求はまるごと切り落とされた。

大物の心理学者であるC・G・ユングからしてが、センターの観点からジェンダーを論じることをためらったように見える。個々の人間のなかにある男としての特質をアニマ、女としての特質をアニムスと呼び、それを各人の内部にある二者として取り扱う考えをユングが導き出す元となった中国のテキスト『太乙金華宗旨』（黄金の華の秘密）で、これはもともとセンターの話だった。すなわち、頭のセンター「天心」の独立した働きの優勢を上昇原理（アニマ）もしくは男の質、体のセンター「下心」の働きの優勢を下降原理（アニムス）もしくは女の質と見ている。

ユングがこれをセンターの話と切り離れたのは、独訳・英訳で「心」が文字どおり「こころ」と解釈され、the heavenly heart（天使的な心？）といったおかしな翻訳となったために、これが単純にセンターの話であるのがわからなかったのかもしれない。あるいは、どちらのセンターが優勢かをめぐるこのような見方は、女が男に劣っているような受け止めかたをされるのを恐れたのかもしれない。

とはいえ、そこに性差を認めないなら、男と女での対立や意見のへだたりの本質を見逃すことになる。単純な事実もしくは傾向として、女は子供を産むという働きや月からの影響を身に受けるということにおいて、体の立場を大きく離れて頭の立場に身を置くことがしにくいということが言えるだろう。これは一面においてハンディであり、マンズフィールドが女権運動を全面的に支持するのにためらいを覚えた（*）のは、女であるとはどのようなことをかめぐる、女としての自覚ゆえのことだっただろう。しかし、体をむやみ

に離れて馬鹿な空想にうつつを抜かすことが少ないということでもあるから、その意味でこれは女にとっての強みであり、男にとってのハンディである。

* キャサリン・マンスフィールド『まっすぐな心の冒険』

また、これは表向きの性別の話というより、男女から生まれた以上はだれのなかにもある、性格が異なる二者の関係をめぐる話である。そして、表向きの性と関係なく、ほとんどの人においては、上昇原理（アニマ）は下降原理（アニムス）に圧倒されがちであり、これについて言うのなら、男も女も同じようにハンディを負い、同じように責任がある。男といってもふつう男は、男というのは名ばかりで、下心（アニムス）の支配下で天心（アニマ）を働かせることに終始する。ローレンスはこれを男の道具性と言いあらわした。男が陥りやすいそんな道具性の背後には、母の影、女の影がある。というように、原因はどちらかにあるというより、どちらにもある、あるいは両者の関係のなかにある。

ブラングウェン家の男たちが、おのれの血管に流れ込んでほとぼしる生命の力を存分に味わうべく、おのれの内へと意識を向けたのに対し、彼女は外へ、熱を帯びて脈動する創造のありかたに背を向けた男たちが彼らにとつての創造と支配を求め、そうやって背を向けた先には何があるのだろうと、知識を広げ、活動を拡大し、自由を増すべく出て行った先へと意識を向けた。

巻末の付録に収めた『虹』の冒頭の部分。男たちはかくかくしかじかだったが、これに対して女たちはという叙述から、ブラングウェンの一族に関する長い物語が始まる。天地との交流のなかもつぱら感覚を内に向け、創造の源から目をそらさない男たちに対し、女たちは外の世界に意識を向け、知識とそれが人に授ける力に関心を寄せる。

これはもしかして、女たちの側における、頭のセンターの働きの目覚め、

というのはつまり、頭のセンターの独立した働きに向けての、頭のセンターの内部からの願望の目覚めでありうるだろうか。いや、自分でなければ自分の子供たちにはこれをという記述から、これはむしろ体のセンターの側に生じた願望であることがうかがわれる。

外の世界で知識を追いかける男たち、それに村の牧師をはじめとする聖職者たちは、頭のセンターの独立した働きを知っていて、それをもって女たちを魅了したのかというと、たぶんそうではなく、権威、支配、便宜、進歩といった体のセンターにとつての利害のために頭のセンターを自在に働かせることへの熟達をもっておのれを際立たせ、女たちの注目を集めたとおぼしい。そこで、知恵の実際の誘惑ということがほのめかされている。

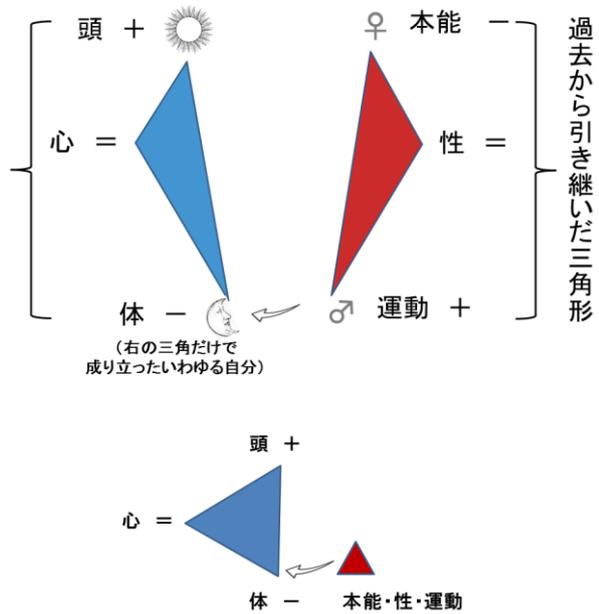
女たちの側にこの誘惑が生じざるをえないのは、身近に暮らす男たちの側に頭のセンターの独立した働きがないからである。男たちの血のなかに生じた理解はもつぱら体に属するものであっても、創造の源への男たちのまなざしの背後には頭のセンターのすぐれた働きがあるのでは？ そこにはもちろん、頭のセンターのすぐれた働きがあるだろう。しかし、それ自身の独立した働きではなく、女たちはそれを目ざとく察する。見事に条件付けられたなかでの頭のセンターのすぐれた働きと言うべきか。それは馬鹿っぽい。そんなのだったら、自分たちはもつとうまく、というのが誘惑である。ただ、そうは言っても、馬鹿からの解放を求めるのは道理である。旧約の神の呪い、もしくは農家脳が転じたところの脳化膿、そんなものに冒された頭による支配はごめんだというのは、頭と体の両方をもって女たちが思うところのはずである。

『恋する女たち』もこれに類する描写から始まる。しかし、男女ではなく、姉妹を対比させている。『虹』に描かれた結末から五年を経て、アースラは、自分は今もう過去から自由になったという思い込みとは裏腹に、あいかわらず頭を使うこと、物事をはっきり見ることが恐がっているように見える。グドランはそうではない。物語が進むにつれ、グドランの頭の働かせかたがただものではないことが、しだいにあきらかになっていく。新しい展開である。

これは危険の種を秘めても。

『虹』での世代から世代へと連なる描写の意図は何だったのか、ということに思うに、それはたぶん、男・女・子があらかわす三角、そういう三角と三角の組み合わせりかた、連なりかたになんらかの秘密があるという思いから、それを描くことにこだわったのだろう。しかし、『虹』で描写されたそれはもっぱら、衰退の流れだった。『恋する女たち』の登場人物のうちローレンスの代弁者とされるバーキンは、いいじゃないか、人類なんか滅びちゃえ、神様がおつとましの造つてくれるから、それが神秘への信頼つてもんだと、自分をノアと勘違いしたような暴言を吐く。これに対し、マンスフィールドをモデルにしたグドランは、バーキンがそんなことを言うのは、自分がないから、空っぽだからということを見抜き、長い熟考の末、ローレンスからは予想しにくい、次のような見解に達する。

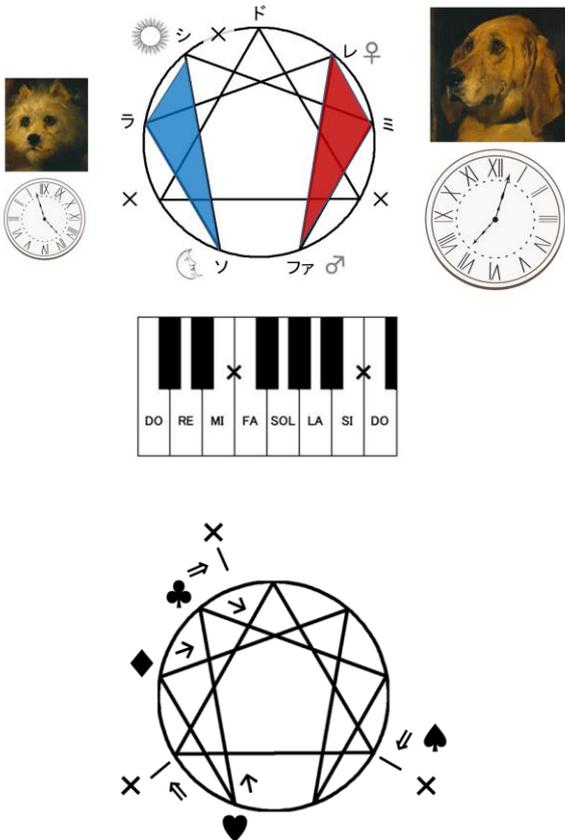
もしかしたら人が育てうる広義の自分



この自分は永遠に動き続ける大きな時計と向かい合った小さな十二時間時計みたいだと、彼女は思った。堂々くんと生意気ちゃんみたいな関係にある大時計と小時計。それともこの関係、生意気ちゃんと堂々くんって言うべき？

大時計と小時計では時間の流れが逆転している。堂々くんと生意気ちゃん (Dignity and Impudence) は、画家のエドウィン・ランドシーアが絵にした犬の親子で、二つの三角のあるべき関係をあらわしている。下向きの流れのなかからの上向きの流れの誕生。

これをもつぱら人の内的な成長に関わることとしてとらえたのが、グルジエフに由来する幾何学的象徴、エニアグラムである。その一解釈では、自分が父母との間で経験した関係など過去から引き継いだものを模倣した運動・本能・性の三角が右側にあつて、それが転じてなりうるところの頭・体・心の三角と向かいあっている。そして、この二つの三角を内包するエニアグラム全体はオクターブ、人が内に形成しうる虹をあらわす。



この虹をみずからの内に形成すべく、エニアグラムの円周があらわす道をひとりで歩むのは困難である。図中の×印は、グルジェフがインターバルと呼んだ、独力で進むのが難しい箇所、新しい力の流入、異質な他者との出会いが必要になる箇所をあらわす。それらの箇所では、人は行き詰まり、出合いを求め、音楽上、インターバルは、ピアノの鍵盤上で黒鍵が欠けている箇所、すなわちミとファの間とシとドの間にあるように見える。これに対し、エニアグラムでオクターブをあらわした場合、シとドの間のインターバルより、ソとラの間の大きい間隔のほうが目立つ。実質において、第二のインターバルはそこにある。すなわち、『恋する女たち』で注目される二十数歳からの数年で人がすることが、のちにシとドの間のインターバルを力強く越えて満足に死ねるかどうかを決める。

ローレンスは、こうしたことを下意識のどこかでとらえていたのだろう。四人の主要な登場人物の位置付け、主要な動き、相互の関係は、エニアグラムであらわしてこそ、もしも作者の意図に逆らうことになりかねないのを承知のうえで望むなら、たぶん明瞭に理解しうる。この明瞭というのがくせものではある。ともあれ、ふつうグルジェフに由来するとされる「センター」、
「ビーイング」といった言葉の採用、複数の体とエネルギー層の描写、そしてグドランの最終的な行き先としてのドレスデンとそこにグルジェフを招いたダルクローズへの言及が、うすうすの了解をうかがわせている。この観点から読み解くための解説を上巻と下巻の巻末に設けている。上巻での解説は控えめ、下巻での解説は決定的な内容であり、いずれも先頭に設けた『虹』からの引用の部分を除いては先には読まないほうがよい。

郷 尚文（訳者）

第一章 姉妹

アースラ・ブラングウェンとグドラン・ブラングウェンは、ある朝、ベルドゥヴァー「ノッティンガム近郊の作者の故郷をモデルにした架空の地名」にあるふたりの父親の家の窓際に座り、それぞれ手仕事をしながら、言葉を交わし合った。アースラは色鮮やかな刺繍を縫い、グドランは膝に乗せた画板の上で絵を描いていた。ふたりとも黙っていることが多かったが、なにか思いが頭をよぎると、それをそのまま口に出した。

「アースラ」と、グドランが言った。「あなたほんとうに結婚なんてしたくないと思ってるの？」アースラは、やりかけの刺繍を膝に置いて顔を上げた。穏やかで、思慮深い顔をしている。

「わからない」と、彼女は答えた。「どんな意味合いで聞いているのかによりけりね」

グドランはちょっとあっけにと取られた。彼女はしばらくじっと姉を見つめた。

「あのね」と、皮肉っぽくグドランは言った。「私が聞いたことって、ふつうひとつの意味しかないと思うけど！でも、こんなふうには思わないかしら……」。ここで彼女はちょっと言いよんだ。「いまよりも状況がよくなるって？」

アースラの表情が陰しくなった。

「そうかもね」と、彼女は言った。「でも、よくわからない」

グドランは、少しいらだちを覚えて、ふたたび口をつぐんだ。彼女はもつと物事をはっきりさせたかった。

「結婚というものを経験しておく必要があると思わないの？」と、彼女は聞いた。

「それって経験なの？」と、アースラは言い返した。

「なんらかの意味でそういうことになるでしょ」と、グドランがクールに

言っただけだ。「もしかしたらいやな経験になるかもしれないけど、経験は経験でしょ？」

「かならずそうとも言えないよ」と、アースラは言った。「経験するのはこれでおしまいというふうになることのほうが多いみたいだから」

グドランはとても静かに座って、その言葉を受け止めた。

「まったくだわ」と、彼女は言った。「これは覚えておくべきことね」。これが会話の区切りになった。グドランは、ほとんど腹を立てたかのように、消しゴムを手に取ると、絵の一部をこすりだした。アースラは刺繍に没頭した。

「あなたはいい話があっても心を動かさない？」と、グドランは聞いた。

「これまでもう数件、断ったかしら」と、アースラは言った。

「それほんと？」。グドランはひそかに頭に血を上らせた。「でも、それってどれもこれも、真剣に考えてみるほどの価値があるような話だったの？冗談じゃなくって？」

「まさに引く手あまたでさ、それもとってもいい男から。私だってそういう男は大好き」と、アースラは言った。

「ほんと？でも、それだったら、あなたのほうもひどくその気になるんじゃないの？」

「理屈ではそうだけど、現実にはそうならない」と、アースラは言った。「いざとなると、その気になんてならない。ええ、もしもその気になってたなら、なんのためらいもなく結婚してたところだけだ。私はむしろ、逆の誘惑にかられるの、そんなのやめとこうってね。これはおもしろいということだ、姉妹二人の顔がぱっと明るくなった。

「おもしろいね」と、グドランが言った。「逆の誘惑、やめようって気がどれだけ強いかな」。ふたりは顔を見合わせて笑った。ふたりとも心の奥におびえを感じながら。

それから長いこと会話がなのまま、アースラは刺繍を、グドランはスケッチを続けた。姉妹であるところの女二人。アースラは二十六歳、グドランは二十五歳になっていた。でも、ふたりとも、現代の若い女性を特徴づける乙

女らしいところを残していた。ヘーバーよりもアルテミスを思わせる女たち。グドランは、とても美しく、感受性が強く、柔らかい肌、柔らかい手足をしている。首と袖まわりに青と緑のリネンのレース飾りが付いたダークブルーのシルキーなドレスを着て、エメラルドグリーンのストッキングを履いていた。自信ありげに人に挑みかかるようなところのある彼女の面持ちには、なにかを待つような繊細なところのあるアースラの面持ちと対照的だった。田舎の人たちは、つまらないことには関わらないというグドランのまったくもってクールなところやそっけない態度を恐がって、「ありゃ利口な女だね」と噂した。彼女は、美術学校に通ったり、そこで働いたり、スタジオに入り浸りになったりしながら、ロンドンで数年を過ごした後、故郷のベルドーヴァーに舞い戻ってきたばかりだった。

「そろそろ人生を共にする男があらわれるんじゃないかと私は期待してただけど」と、グドランは言い、ふいに上くちびるを噛むと、ずるく笑うようにも見え、苦渋をあらわすようにも見える、奇妙なしかめっ面をしてみせた。アースラは恐くなった。

「じゃああんた、そんな男がここで見つかるかと期待して帰ってきたわけ？」と言って、彼女は笑った。

「まあ、なによ」と、グドランは高らかに叫んだ。「私は自分からわざわざそんな男を探し回ったりはしないわ。でも、じゅうぶんな蓄えのある、とても魅力的なしっかりした男にめぐり合うことがあったなら、そのときには……」と、彼女は皮肉な調子で、言葉を結ばないままにした。それから彼女は探るような目でアースラを真剣に見つめた。「あなた自身はそろそろ退屈を覚えたりしないの？」と、彼女は姉に尋ねた。「物事が実を結ばないまま終わろうとしていると感じないの？　まるで実を結ぶことなく！　すべてがつぼみのまましおれていく」

「いったい何がつぼみのまましおれていくのよ？」と、アースラは聞いた。「すべてよ。それには自分も含まれる、おおむねすべてのことが含まれる」。短い沈黙が続く、そのあいだ、それぞれがおのれの運命のことを漠然と思っ

「それを思うと恐いわね」と、アースラは言い、ふたたび短い沈黙が続いた。「でもあんた、結婚するだけで自分がどこかに行けると思ってるの？」

「避けようのない次の段階のように思えるけど」と、グドランが言った。アースラは、ちょっとした苦々しさをもって、それについて思いを巡らせた。彼女は数年前から地元のウィリー・グリーン・グラマー・スクール「中高一貫校」でクラス担当の教員をしていた。

「そうね」と、彼女は言った。「理想としてはそう思えるわね。でも、それを現実のこととして想像してみるといいよ。自分が実際に知ってる男をひとり選んで、そいつが毎晩、家に戻ってきて『ただいま』と言い、自分にキスするってのを想像してみなさいよ」

あっけにと取られたような沈黙。

「そうね」と、か細い声でグドランが言った。「そんなの絶対に考えられない。男が実際にどんなものかってことを思ったら」

「もちろん、それは別に子供ってものが……」と、なにかをあやしむような感じで、アースラが言った。

グドランの顔がこわばった。

「あなたほんとうに子供なんて欲しいの、アースラ？」と、グドランがクールに尋ねた。アースラは面食らったような顔をした。

「それは人が自分で勝手に決められることじゃないと思うんだけど」と、彼女は言った。

「あなたそんなふうにも思ってるの？」と、グドランは聞いた。「私の場合、子を産むなんて気にぜんぜんならないけど」

グドランは、表情のない、仮面のような顔をアースラに向けた。アースラは顔をしかめた。

「たぶんそういう気持ちは本心じゃないのね」と、彼女は折れた。「おそろしく魂の底では子供なんて欲しがってない。浅い気持ちでそう思ってるだけ」。グドランの顔がこわばった。そこまで物事をはっきりさせたくなかった。

「他人の子を見るとそんなふう……」と、アースラは言った。ふたたびグドランはアースラをじろりと見た。ほとんど敵意がこもった目

で。

「そうね」と、彼女は言い、会話に区切りを付けた。

ふたりは黙って作業を続けた。アースラには、人間の本质に宿る炎の不思議なきらめきをいつも身から発しているようなところがある。いま彼女は、それを針に引つ掛け、縫い込んだり、手前に引いたりしているように見えた。彼女は意識を内に保ち、あるいは内に向けて、長い時間を過ごした。その状態で仕事をし、日々を過ごし、そしていつも考え、しっかりとへ生の感触を確かめ、自分なりにそれを理解しようとした。外の世界でのいそがしさを離れてそうしているうちに、地面の下の暗いところで、なにかが育つ。それが最後の土くれを突き破ったなら、そのときには！ 子宮のなかで赤ん坊がするように、彼女は両手を伸ばし、探ってみるが、いまはまだ無理みたいだ。それでも彼女は、いずれ起きるべきことの不思議な兆しを感じる事ができた。

彼女はやりかけの刺繍を下に置き、妹に目をやった。彼女は、グドランのことをとても魅力的だと思った。柔らかな感じ、繊細で絶妙な質感から伝わってくる豊かなもの。無限の魅力をたたえていた。彼女にもどこかプレイフルなところがあった。ものすごく辛らつな皮肉屋でありながら、まったくもって控えめでもある。アースラは心の底から彼女に感嘆していた。

「スモモちゃん、あんたどうして家に戻って来たの？」と、彼女は聞いた。

グドランは自分が感嘆の目で見られていることがわかった。彼女は仕掛り中のスケッチから身を起こすと、きれいにカールしたまつ毛の下からアースラを見た。

「どうして戻って来たのかって、アースラ？」と、彼女は言った。「それは自分で自分にもう千回ぐらい聞いたわ」

「それでわかったの？」

「うん、わかったと思う。もっとうまく跳ぶための準備を整えようと、それだけのために家に戻ってきたんじゃないかしら」

そう言つと、いかにもわかったふうののんびりした風情で、彼女は長いこ

とアースラを見た。

「それはわかってる」と、質問をはぐらかされ、やや当惑したような顔で言い、その様子はちっともわかっていないみたいだった。「だけど、どこへ跳ぼうっていうのよ？」

「あら、それはどこでもかまわない」と、グドランはちよつと気取って言った。「崖っぶちから跳んだら、どこかに着地するもんだから」

「でも、それってとても危ないことじゃない？」と、アースラは聞いた。グドランの顔にゆっくりと人をからかうような笑いが浮かんだ。

「ああ！」と、彼女は声を発し、笑った。「たんに言葉のうえでのことをとらえて何を言うのよ？」。こう言つて、このときも彼女は自分のほうから会話に区切りを付けた。でも、アースラのほうは、まだ思いにふけていた。

「それであんた、こうして帰ってきてみて、家のことをどう思うの？」と、彼女は聞いた。

グドランは、答える前にしばらく、冷たい表情で口をつぐんだ。それから冷たいが真実の響きを帯びた声で、次のように言った。

「自分はまったくここにそぐわない」

「父さんのことどう思う？」

私を変なところに追い込まないでというような嫌悪に近いものを浮かべた目でグドランはアースラを見た。

「まだだにも思っていない。思わないようにしてるから」と、彼女は冷たく言った。

「そうね」と、心をぐらつかせて、アースラは言い、これで会話はほんとうに行き詰まった。姉妹二人は、なにもない空間、恐るべき深淵を目の前にした。崖っぶちからその向こうを見てしまったような。

ふたりはしばらく黙つたままそれぞれの作業を続けた。グドランは、外に出せない感情のうねりのせいで、ほおを赤く染めていた。こうして心深くの感情が目覚めたことを彼女は苦々しく思った。

「家を出て、結婚式を見に行かない？」と、あまりにもさりげなさを装つた声で、ついにグドランが言った。

「うん！」と、調子に乗りすぎた感じでアースラが叫び、なにかから逃げ出そうとするかのように、やりかけの刺繍を放り出すと、跳び上がり、その場の緊張がどれほどのものであったのかをあらさまにするともに、嫌悪の混じったいらだちをもってグドランの神経を逆なでした。

上の階へと階段を上がりながら、アースラは、自分の家というものを、自分を取り囲むこの家というものを意識した。そしてそれへの憎悪を覚えた。このしみつたれた、自分にとってあまりになじみのあるところ！家、それがかもしだすもの、その空気がまるごと、そこに染み付いた古臭い生活のしきたりを忌み嫌う自分の気持ちの深さを彼女は恐れた。自分の気持ちに彼女はおびえた。

それからややたつて、女ふたりはベルドローヴァーのいちばん大きな通りを足早に歩いていった。幅の広い通りに沿ってとところどころ店や住宅がある、貧しいわけではないが、さまにならない、くすんだところ。チエルシーやサセックスでの暮らしを打ち切って帰ってきたばかりのグドランは、ミッドランド「イングランド中部地方」の小さな田舎町のこのぶざまさに身をすくませた。それでも彼女は、卑小さを絵に描いたような町並みを抜け、路面が砂でざらざらする、すすけた長い通りを先へと進んだ。彼女はいたるところで人からじろじろ見られ、そんななか道を行くのは延々たる苦行のようだった。わざわざこんなところに帰ってきて、この無定形の荒涼とした醜さに全身をさらすことで自分にいったい何が起るのかを試してみるなんて、彼女はなんと不可解なことを。どうして彼女は自分をそんな目にあわせようと思ったのか？ 彼女はまたそれを続けたのか？ この醜いまるで意味をなさない人たちの群れと、このぱっとしない田舎町、そこから生じる耐えがたい苦痛をあえて耐え忍ぼうとするのはなぜか？ これではまるでほこりのなかで動き回る甲虫のようだと思つた。彼女は嫌悪に満たされた。

ふたりは大通りから脇道に折れ、くろぐろとした畑が広がるそばを通り過ぎた。煤煙で真っ黒になったキャベツが恥ずかしげもなく並んでいる。だれもそれを恥ずかしいと思わない。それを恥ずかしいなんて思う人はどこにも

いない。

「地下世界の光景みたい」と、グドランが言った。「炭鉱夫たちが地上に戻ってくるときに携えてくるのね。そういうものを下から上へと。アースラ、これすごい、ほんとうにすごいじゃない。ほんとうにお見事、別世界じゃない。住んでるのはグール「食屍鬼」ばかり。すべてがおどろおどろしい。すべてが現実世界のグール風のレプリカなのね。レプリカ、グール。すべてが土まみれ、すべてがすすけてる。狂気の世界にいるみたい、アースラ」

姉妹は、黒っぽく汚れた一帯を突つ切る黒い小道を進んでいた。左側には、大きな風景が広がっている。炭鉱のある谷間はそちら側にあつた。逆側には、丘が広がり、トウモロコシ畑と林があるが、遠くのほうは、クレープのヴェール越しに見えるように、すべてが黒っぽくかすみ、何があるのか判別しがた。暗い大気のなか、魔法のように、白煙と黒煙が数本の安定した柱となつて立ち昇っている。近くに目を転じると、住居が長い列をなして立ち並び、その線はゆるやかな曲線を描きながら丘へと向かい、斜面を上ると、頂上からやや下のところでまっすぐになつた。黒くすすけた赤レンガに黒くすすけたまろいスレート屋根を載せた家々。姉妹が歩いている小道は黒く、坑夫たちの重たげな足によって踏みしめられ、柵によって草地から隔てられていた。広い道へと戻るのに使う渡り板は、そこを通る坑夫たちのモルスキンに磨かれてびかびかになつていた。次に女ふたりは、先ほどのよりみずばらしい住居が両側に立ち並ぶ間を進んでいった。女たちが、ざらつとした生地のエプロンの上で両腕を組み、自分たちが住まう一角の端に立つておしゃべりしつつ、未開の土民を思わせる飽くことのないまなざしでブランクウェン家の姉妹をじろじろ見た。子供らはふたりの名前を口にした。

グドランは、なかば頭をぼっとさせながら足を進めた。これが人間の生活なら、これもそれなりにまとまった世界に生きる人間と見なすなら、彼女自身の世界での彼女自身の人生はいったい何なのか？ 彼女は自分が履いている草緑色のストッキング、自分がかぶっている大きなヴェロアの帽子、自分がまとった鮮やかなブルーの大きな柔らかいコートを意識した。彼女はまるで自分が宙を歩いているかのように感じた。足元がぐらつき、心臓は縮こまり、

いつ地面にばったり倒れてもおかしくないと考えた。彼女は恐怖を覚えた。

彼女はアースラにつかまった。アースラのほうは、長年の慣れのせいで、この暗く、ぶざまで、敵意ある世界からの挑発に対して、もう無感覚になっていた。でも、グドランのほうはというと、なにかの試練のさなかにあるかのように、ずっと心が悲鳴を上げていた。「私はもう引き返したい。逃げ出したい。こんなの知りたくない。こんなものがあるなんて知りたくない」。でも、彼女は先へと行かなければならないのだった。

アースラは彼女の苦しみを察した。

「あんたこういうのいやなのね？」と、彼女は聞いた。

「私の心を落ち着かなくするの」と、グドランはたどたどしく言った。

「そんなにかからずに通り過ぎるよ」と、アースラは言った。

じきに解放されるという思いにしがみつきつつ、グドランは足を進めた。

ふたりは炭鉱区域を離れ、丘を回り込み、その向こうに広がるもつと純然たる田園地帯をウイリー・グリーンに向かって歩いた。それでもまだ、かすかに黒みを帯び輝きが野原や樹木に覆われた丘の上に残り、空気中でほのかに光っているように見えた。ほんのり日差しが射す、肌寒い春の日だった。クサノオウが生け垣の下のほうから黄色い花をのぞかせ、ウイリー・グリーンのコテージの庭ではスグリが葉を茂らせつつあり、石の壁に垂れ下がる灰色がかったアリッサムが白い小さな花を咲かせつつあった。

ふたりは道を折れ、二つの堤防にはさまれた幹線道路を下って教会のほうに向かった。坂の下道がカーブする箇所近くの木の下で、結婚式を見に来た人たちが小さな一団となって、事が始まるのを待ち構えていた。地元でいちばんの炭鉱主であるトーマス・クリッチの娘が海軍士官と結婚するのだった。

グドランはそれを見ると身じろぎし、「引き返しませう」と言った。「みんなおかしな人たちじゃない」

彼女はどっつかずの状態で路上にとどまった。

「気にしないで」と、アースラが言った。「だれも害をなしたりしないから。みんな私のことを知ってる。気にしないでいいんだよ」

「でも私たちがあのなかを通り抜けるの？」と、グドランが聞いた。

「この人たち、ほんとにぜんぜん問題ないのよ」と、アースラは言い、足を進めた。こうしてふたりは連れ立って、見物しようとしてきた、雑然とした付近の人たちの一団に近づいていった。そのほとんどが女、坑夫らのあまりとりえのなさそうな妻たちだった。地下世界の住人らしい用心深い顔つきをしていた。

姉妹ふたりは身を固くし、まっすぐと門のほうに足を進めた。女たちはふたりを通してはくれたが、動くのはごめんだよといわんばかりに、ちよつと道を開けてやったにすぎなかった。姉妹ふたりは黙って石の門を通り抜け、階段を上り、警官がこちらに目を向けてくるなか、赤いじゅうたんが敷かれた上を歩いていった。

「あのストックキング、いったいいくらするんだろうね」と、グドランの後ろで声がした。癡猛な怒り、殺してやろうかという激しい怒りが、ふいに彼女の全身をとらえた。自分の目に映る世界が清浄なものとなるよう、こいつらみんな消えてもらっても、片付けてもらってもかまわないといわんばかりの。彼女はどれほどいやな気持ちで、教会の敷地内に敷かれた赤じゅうたんの上を、みんなの視線を浴びつつ、進んでいったことか。

「私、教会に入らない」と、ふいに彼女が決然と言いつつ、アースラはすぐに足を止め、方向転換すると、教会の隣に校庭があるグラマースクールの小さな裏門へと続く小さな脇道へと入った。

教会の敷地の外、植え込みに囲まれた校庭の門のすぐ内側で、アースラは、月桂樹の陰にある低い石壁に腰掛けてしばらく休憩した。彼女の後ろには、学校の大きな赤い建物が静かにたたずみ、休日であるこの日、窓はすべて開けっ放しになっていた。前方には、植え込みの上に、古い教会の白っぽい屋根と塔が見えている。路面は落ち葉に覆われていた。

グドランは黙って座った。口を閉じ、目の前の光景から顔をそらしている。自分がこんなところに舞い戻ってきたことを悔いているのだった。アースラは彼女を見て、なんて驚くほど美しいんだろうと思ひ、当惑して顔を赤らめた。だが、彼女には、アースラの生まれつきの性質にとって、じやまと思わ

せるところ、うんざり感じさせるところがあった。アースラは、グドランがそこにいると自分が感じてしまう堅苦しさや圧迫感から自由になれるよう、ひとりになりたいと思った。

「まだしばらくここにいます？」と、グドランが聞いた。

「私はちょっと一息ついてただけ」と、まるで叱られてもしたかのようアースラは言い、腰を上げた。「ファイヴス「ハンドテニス」のコートそばの角に行つて、そこで立ちましよう。そこからならぜんぶ見えるから」

そのときふと、教会の敷地に日の光が明るく降り注ぎ、漠然とした樹液と春の匂い、おそらくは墓に生えたスミレの香りが漂ってきた。ヒナギクがちらほら白い花を咲かせ、それが天使のように輝いていた。空中に伸びた枝から広がるブナの葉は血のように赤い色をしていた。

十一時になると、時間どおり、馬車が次々にやつてきた。門のそばに集まった群衆はどよめき、馬車がやつてくるたびにみんなの注意がそこに向かった。結婚式の招待客らは、階段を上り、赤いじゅうたんが敷かれた上を通つて、教会へと向かった。日が照っていたので、みんな陽気で、はしゃいでいた。

グドランは、客観的な質を帯びた好奇心をもつて、やつてくる人たちを観察した。彼女は、そのひとりひとりを、本の登場人物、絵の主題、劇場のマリオネットのように、ひとつのできあがったキャラクター、仕上がった作品として見た。人々が彼女の目の前を通り過ぎて教会へと向かうのを見ながら、彼女は各自のいろいろな性格を目に留め、それぞれにぴったりの背景を考え、それぞれにぴったりの光のもとで見つめることで、それぞれについて答えを出し、それを永遠なるものとして記憶にしまい込むといったことをするのを楽しんだ。彼女はこうして彼らを知り、知ってしまったらもう用はない。封をして、消印を押して、もう彼女にとってどうでもいいものとなるのだった。というのも、なにか自分の知らないもの、納得しがたいものを秘めているように見える人はいなかったから……クリッチ子家の人たちがあらわれるまでは。そのときになってやっと彼女は興味をかきたてられた。こりやどうも簡単に

判断できるような人たちじゃない。

まずは母親のクリッチ子夫人が長男のジェラルドをお供にしてあらわれた。

この晴れの日に参列者として見苦しくないようにとあきらかになんらかの努力がされてはいたが、それでも夫人は、きちんとした身なりをするのを奇妙に拒むようなところがあった。顔は血色が悪く、黄色がかっている。肌は白く、透き通っている。体はかなり前かがみで、造作のはっきりした顔はりりしく、もしかしたらろくに見えていないのかもしれない、緊張した、猛禽のような目をしている。色の抜けた髪は乱れぎみで、青いシルクハットの下からこぼれた髪がダークブルーのシルクのジャケットの上に垂れていた。あたかも偏執狂の女のように見えた。人前に出るのを嫌うが、とてもプライドが高い。

彼女の息子は、金髪の日焼けしたタイプで、背は高め、がっしりした体格で、ちょっと度を過ぎたぐらいに立派な身なりをしていた。だが、この男にも、まるで周囲の人たちと同類ではないかのような、奇妙に用心深そうな目つきと、意識せずとも外にあらわれるきらきらしたものがあった。グドランは、すぐにこの男に目を付けた。彼にはなにか北方の国々を思わせる場所があつて、それがあつた種の磁力をもつて彼女を引き付けた。透きとおつた北方系の肌と金髪は、氷の結晶を通り抜けて屈折する日光の輝きのようだった。北極圏から来たもののように、彼はさすがしく、なめらかで、澄みきっているように見えた。三十歳ぐらい、またはもっと上だろうか。ほほえみを浮かべた気のいい若狼とでもいうべき、つやのある美しさと男らしさを認めつつも、この男の不穏なまでに落ち着き払った様子と、抑えがたい気性の激しさをうかがわせる危険な匂いを、彼女は見逃さなかった。「この男のテーマは狼」と、彼女はつぶやいた。「そしてあの母親は、人に慣れるということのない古狼」。そう思ったところで、彼女はふいに発作のような感覚に襲われ、別世界に運ばれたようになった。まるで地球上でただひとり自分だけがほかにだれも知らないたいへんなことを知ってしまったかのように。彼女は不思議な世界に運ばれて、激しい感覚が全身の血管を駆けめぐった。

「よろしい神様！」と、彼女はひそかに叫んだ。「これって何？」。それからまもなく、彼女はおのれに向かつて、力のこもった声で、「この男のことをもっと知らなくては」と言った。あの男をまた見たいという願い、ある種のなつかしさ、どうしてもまた見なければという気持ちに、彼女はさいなまれた。

見誤ったのではない、夢を見ていたのではない、あの男との関係で自分はたしかにこの不思議で圧倒的な感覚を覚えたのだ、おのれの本質においてあの男のことがわかったせい、あの男のことを強く思ったせい。そのことを確かめなければならぬ。「もしかして私ひとりだけが選ばれて、彼をあんふうに見ることが許されたのだろうか。もしかしてこの世で私と彼のふたりだけが薄い金色を帯びたオーロラの光に包まれているのだろうか」と、彼女は自問した。彼女は信じられない気持ちで、まわりで起きていることをほぼ忘れ、思案にふけた。

花嫁の付き添いをする女たちはもう来ていたが、花婿があらわれない。なにか手違いがあつて、結婚式がめちやくちやになるのではないかと、アースラは案じた。まるで自分の責任であるかのように、彼女は心配した。花嫁の付き添いをする女たちの代表もあらわれた。アースラは、それら付き添い役の女たちが階段を上がっていくのを見た。そのうちのひとりを彼女は知っていた。背が高く、動作が遅く、気が乗っていないように見える女で、重たい金髪をたらし、青白く長い顔をしている。彼女の名はハーミオン・ロディス。クリツチ家と親しい間柄にある。彼女は、淡い黄色のベルベットの平べったい特大の帽子のバランスをとりながら、頭を上げて、こちらに向かつてくるところだった。ナチュラルカラーとグレーのダチョウの羽根で帽子を飾り立てている。彼女はほとんど意識の働きの認められない夢うつつの状態で足を進めていた。顔を正面に向けてはいたが、目の前の世界を見ているふうではない。彼女は裕福だった。なめらかで脆弱なペールイエローのベルベットのドレスをまとい、バラ色の花を咲かせた小さなシクラメンをたくさん手にしていた。靴とストッキングは茶色がかかった灰色で、帽子に差した羽根の色と合っていた。髪が重たそうなうえ、前に向かつて歩いてくるその様子は、腰

のあたりに独特の固さがあるせいで、いやいや動いているような奇妙な印象を伴った。すてきなペールイエローのドレスに茶色とバラ色が映えて、彼女の姿は印象的ではあったが、どこか人に反発を覚えさせるところがあった。彼女が通り過ぎるのを見物人たちは黙って見た。その姿に感嘆し、刺激され、からかってやりたい気持ちを覚えつつも、あれこれの理由から口をつぐんでいた。彼女は青白く長い顔をちよつとロゼッティの絵にあるみたいにやや上に向けていたが、麻薬が効いているかのような表情から、あれこれの奇妙な思いが心の中の暗いところどぐるを巻いているのがうかがわれ、彼女はけっしてそれから逃れられないようだった。

アースラは夢中になつて彼女を見た。彼女のことは少しばかり知っていた。ミッドランズ一帯でいちばん際立った女性として知られている。彼女の父親はダービーシャーの昔風の準男爵だったのに対し、彼女のほうは新派の女性で、さかんに知識をひけらかし、意識なるもので頭を重たくし、神経をすり減らしていた。改革というものに情熱的な関心を寄せ、みんなのためにということに自分の魂を捧げているつもりだった。それでいて、男があつてこそ女の女なだった。男の世界の価値観で彼女はおのれを支えてきた。

彼女はあれこれの分野で才能のある男たちとの間でいろいろなかたちでの精神と魂の交わりを体験してきた。そうした男たちのうち、アースラが知っているのは、郡の視学官「学事の視察や監督をする行政官」を務めているルパート・バーキンだけだった。これに対し、グドランのほうはロンドンで、ハーミオンとつきあいのある他の男たちと知り合っていた。アーチストの友人たちとともにいわば別の世界で生きるようになってから、グドランはこれまでうちに、有名な人や高い地位にある人とたくさん知り合っていた。ハーミオンとはこれまでに二度会っていたが、うまが合わなかった。ロンドンの雑多な知り合いたちの家で対等の関係でつきあいを結んだ後、身分の差がはつきり意識されるこのミッドランズで再会するのは、変なものだった。というのも、グドランは社交面でうまくやっていて、芸術と関わり合いになりたがる怠惰な貴族階級の者たちの間に少なからぬ友人を得ていたからである。ハーミオンは、自分が完璧な身なりをしているのをわきまえていた。ウイ

リー・グリーンで自分が出くわしうるだれとも社会的な地位において自分が対等以上であることもわきまえていた。文化と教養の世界で自分がそれなりに認められているのもわきまえていた。彼女は文化の担い手、思想の世界の巫女^{みこ}だった。社会、思想、文壇、芸術において頂点を極めたものすべてに通じていて、いつも超一流のものに囲まれて動き回り、そうすることにすっかり慣れていた。彼女はいちばんになった人たちの間に身を置いているので、だれも彼女のことを悪く言えないし、だれも彼女を馬鹿にできない。彼女を悪く言う人たちは、階級、富、思想の高邁さ、進歩性、あるいは理解において、彼女に劣っているのだ。したがって、なにも彼女を脅かさないはずだった。生まれてからずっと、彼女は自分自身を、傷つきえず、責められえず、世間の批判にさらされえないものにしてきた。

それなのに、彼女の魂は、ことあるごとに暴かれ、責められた。教会への道を歩いているときさえ、自分はなにに関しても責められる理由などなく、申し分のない身なりをしていて、一流である、いつもながらわきまえているのに、その自信とプライドの陰で後ろめたさを覚え、中傷、からかい、軽蔑にさらされると感じるのだった。自分は傷つきやすい、自分には弱みがある、自分の體には秘密のほころびがあると、彼女はしじゅう感じていた。それがどんなものか自分でもわからなかった。しっかりと自分、自然な自覚がないのだった。それは恐るべき欠陥、恐るべき欠落だった。内的な存在の足らなさなのだから。

それで彼女は、この穴にふたをしてくれるだれか、永遠にふたをしてくれるだれかを求めた。それで彼女はルパート・パーキン^{ルパート・パーキン}を求めた。彼がそばにいるときには、彼女はおのれを完全なもの、満ち足りたもの、まとまったものと感じられた。それ以外の時間となると、断崖のへりに築かれた砂上の楼閣にいるようなものだった。自分を目立たせたり安心させたりするのに使えるものはいくらでも持っているのに、気性のしつかりした女の用人などがちよつとした仕草でからかいや軽蔑をちらつかせるだけで、彼女はばったりと倒されてしまうのだった。そしてそういうなかですと、この物思いにふ

けりがちな、苦悩する女は、美をめぐる見解、教養、世界観、無関心な態度からなる自己防衛の仕組みをせつせと作り上げてきた。それでもなお、自分には足りないものがあるという恐ろしい思いを埋めきれなかった。

もしもパーキンが彼女と親密で永続的な関係を築いてくれたなら、この不安な人生の旅のなかでも、安心感を味わえたであろうものを。彼は彼女を元気づけ、勝ち誇った気分にする事ができるはずだった。天の高みにいる天使たちと比べてさえ自分を誇りに思えるぐらいまで。彼がその気になってくれさえしたら！ でも、彼女はそれをめぐる不安にさいなまれていた。彼女は自分が美しく見えるように務めた。彼がほんとうにその気になってくれるほどの美と優越性の度合いにまで自分を高めようとした。でも、どうやってみても、自分は劣っていると思えるのだった。

彼のほうもよくわからない男だった。彼は彼女がまとわりつくのを嫌がった。しきりに彼女を振り払おうとした。彼女が彼を自分のものにしようとするほど、彼は彼女を押しつけようとした。それでいて何年も前から恋人同士なのだ。ああ、それはとてもうんざりする、とても痛々しい関係で、彼女は疲れきっていた。それでも彼女は自分を信じていた。彼が自分と別れたがっているのを彼女は察していた。自分とのことをおしまいにしていかに自由になろうともがいているのを知っていた。それでもなお、自分には彼を自分のもとに留めるだけの強さがあると信じていた。そして自分が身につけたと思っている高度の知識に信頼を置いていた。彼女は高度な知識を身につけた女、みずからが真実の試金石となった女なのだった。天球で二つの星が近づいて重なり合うように彼といっしょになることさえかなえば、もう完璧のはずだった。

そのような運命的な巡り合いは、^{コンジャンクション}彼にとってもこのうえない成就なのに、わがままな子供がいよいよやをするように、彼はそれを拒むのだった。言うことを聞かない子供のがんこさをもって、彼はふたりの間に生じた聖なる絆を断ちたがっている。

彼もこの結婚式にあらわれることになっていた。花婿の付添人として。も

う教会内で待機していることだろう。自分が入っていったら気づくはず。神経質な緊張と願望で身震いしながら、彼女は教会の扉を抜けた。彼はもう中にいるはず。間違いなく、このドレスの美しさにびっくりする。間違いなく、彼のためにこそこんなに美しく身を飾っているのだと気づく。そして彼にはわかるはず。彼女は彼のためにあるのだと。彼のために用意されたいちばんの女、最高の女。間違いなく、彼はこうして自身のために用意された最高の運命を受け入れる。彼はもう彼女を拒まない。

あまりに思いにふけりすぎたせいであまり細い体を震わせつつ、目を左右に走らせて彼の姿を探した。花婿の付添人として彼は祭壇の横に立っていないければならなかった。はつきりと見るのをいやがるように、彼女はゆっくりとそこに目の焦点を合わせた。

あきらかにそこに彼の姿はなかった。嵐のような恐慌に見舞われ、彼女は自分がおぼれるのではないかと思った。決定的な絶望感に彼女はうちのめされた。彼女は機械的な足取りで祭壇に近づいた。ここまで完全に決定的な絶望感を味わうのは初めてだった。死ぬよりひどい、完全な空虚感。

花婿とその付添人はまだ姿をあらわしていないのだった。外でがやがやいう声がだんだん大きくなった。アースラはそれをまるで自分の責任のように感じた。花嫁が来ているのに花婿が来ないなんてことに彼女は我慢ならなかった。結婚式を茶番にしてはいけない。そんなの許せない。

それなのに、あっ、いま、リボンとコケイド「ふつう赤と青で花をかたどった円形の布飾り」花嫁の馬車が向こうからやってくる。灰色の馬二頭が楽しげにカーブを曲がって目的地である教会の門に向かって駆けていて、その動き全体に笑いを誘うところがあった。そしていまついに笑いと愉快が頂点に達する。今日の花形を外に出すべく、馬車の扉がさつと開けられた。「最初に馬車から降り立ったのが花嫁ではなかったの」路上の見物人たちからかすかに失望のうなり声があがった。

早朝の気配のなかへと馬車から最初に出てきたのは、まるで影のような姿をした父親だった。背が高く、やせていて、うっすらと灰色がかった黒いひ

げを生やした、悩み疲れた男だった。彼は馬車の扉のそばで呆然としたままじっと待った。

扉の開口部には、葉の付いた枝と花を見事に束ねたものが飾られ、サテンと純白のレースがきらめき、次のような愉快な声が聞こえていた。

「これじゃどうやって中に入るの？」

待ちかねた人たちの間を興奮の波がはしった。人々は互いに体を押し付け合って、花嫁が通るための空間をこしらえ、花のつぼみで飾られた前かがみの金髪の頭と、馬車の踏み段に向かってしずしずと降りされた繊細な白い足をじっと見つめた。ふいに白波が泡を立てて押し寄せたかのように見えた。朝の光のなかで木陰にたえずむ父親のそばから、花嫁が白一色の姿で、笑い声を響かせつつ、ヴェールをなびかせて、ふいに進み出たのだった。

「到着！」と、彼女は言った。

彼女は自分の悩み疲れて血色の悪い父親の腕のひじに手を当て、ドレスの軽い裾をなびかせながら、永遠に心に残るべき赤じゆうたんの敷かれた上に足を進めた。彼女の父親は、無言で、黄色みがかった顔と黒いひげがいつそう気疲れを物語っているようで、すっかり精気が抜け落ちたようなありさまで、硬くなって階段を上がったが、そのあいだもずっと、花嫁の発する笑いに満ちた気が彼に付き添っていた。

それなのに花婿があらわれない！ 花嫁にとって許しがたいことだ。アースラは、不安で心を張り詰めさせて、向こうの丘へと目をやった。その丘の坂道を下って花婿はやってくるはずだった。馬車が見えた。疾走していた。いま視界にあらわれたばかりのところだった。そう、花婿の馬車だった。みんなより遠くまで見通せる位置にいたアースラは、花嫁と群衆のほうに向かって、意味不明の叫びを発した。花婿が来るよということを知らせてやりたかったのだ。だが、彼女の叫びは意味不明でちゃんとみんなに届きもしなかったの、教えてあげたい気持ちと困惑の板挟みになって、彼女は顔を真っ赤にした。

馬車はがたがた揺れながら丘を下り、こちらに近づいてきた。人々の間か

ら叫びが上がった。ちょうど階段を上りきったところにいた花嫁は、なんの騒ぎかと、楽しげに後ろを振り返った。人々の混乱、門前に停車した馬車、そしてそこから転がり出てきた自分の恋しい人が、馬をよけると、群衆の間に突っ込んでいくありさまを彼女は見た。

彼女は、敷地内の小道の上で日に照らされて立ったまま、彼女は手にしたブーケを彼に向かって振ってみせると、「チブス！ チブス！」と、からかうような調子で、高揚した声でふいに彼の名を呼んだ。帽子を手に人をよけながらそちらに向かおうとしているところの彼には聞こえていない。

上から彼を見下ろして、彼女はふたたび「チブス！」と叫んだ。

彼はなにがなんだかわからないまま上に目をやり、花嫁とその父親が自分より高いところにある小道に立っているのを見た。奇妙な、びっくり仰天したような表情が彼の顔に浮かんだ。彼は一瞬だけちゅうちよした。その後で、体勢を整えると、彼女に追いついてやろうと、猛然とダッシュした。

「あははは！」と、吸う息が強調されたおかしな笑いを漏らすと、彼女は反射的に身が動いたかのように、くるっと背を向けて、信じられないような早さで白い足を動かし、捕まるもんかというように、白いドレスをなびかせて、教会へと駆けた。若者は猟犬のように彼女を追い、飛ぶように階段を上がると、彼女の父親を追い越し、石段を下る猟犬みたいにしなやかな足腰の筋肉をせつせと動かし彼女を追った。

「行け、花嫁を捕まえろ！」と、急に活気づいた下品なおばさんたちが叫んだ。

彼女は水の泡みたいに花をこぼしながら教会の建物の角を曲がるために体勢を整えた。彼女はちらっと振り返り、野性的な笑い声を響かせると、挑みかかるかのように、ちよっと後ろを向いて立ち止まった後、灰色の石の控え壁の向こうに姿を消した。その一瞬後、花婿が、前かがみの姿勢で走りながら、静かにたたずむ石壁の隅を片手でつかみつつ角を曲がり、強くしなやかな足腰を躍動させて、やはりその向こうに姿を消した。

そのときまた、門のあたりにいる群衆の間から叫びと歓声が上がった。そしてこのとき、アースラは、「花嫁の父親である」クリッチ氏の暗く、やや前

かがみの姿に改めて気づいた。彼は小道の上の中途半端な位置に立ち止まり、教会に向かつての新郎新婦のかけっこを見ていたのだった。その一幕が終わったいま、彼は振り返り、ルパート・バーキンに目をやった。バーキンはすぐに彼に追いついた。

「この後は新郎と私が最初のあいさつをすることになります」と、うす笑いを浮かべながらバーキンが言った。

「ああ！」と、花嫁の父親はそっけなく言った。そして二人の男はいっしょに角を曲がって小道を上がっていった。

バーキンは、クリッチ氏に負けないぐらいやせていて、青白く、病的に見えた。でも、彼の場合、細身とはいえ、しっかりした体つきをしていた。彼は片足を軽く引きずるような歩き方をしたが、それはたんに自分を意識しすぎるせいでそうなるのだった。自分の引き受けた役にふさわしい身なりをしていたが、隠しがたい違和感があり、それがちょっとこっけいに見える。自分を他人から切り離すくせのある頭のいい男で、世間的な場にはそぐわなかった。それでも世間の良識に合わせようとするので、自分を茶化しているように見えた。

まったくもってお決まりのタイプのありふれた常識人のふりをしていた。そして、まわりの空気をうかがいつつ、瞬間瞬間に相手に合わせて、これとても上手にやってのけ、良識の鏡とでも言うべきものを演じたので、それを見せられた人たちはそれではばらく目がくらみ、すっかり安心してしまい、この男の孤立癖を責めないのだった。

いま彼は、敷地内の小道をクリッチ氏と並んで歩きながら、気さくかつ楽しげに彼と言葉を交わしていた。彼は、まるで綱渡り芸人のように、状況に合わせて自分を演じた。でも、そうやって気楽さを装いながら、いつも渡された綱の上にいる。

「出てくるのがここまで遅くなってしまって、とても申し訳ない」と、彼は言っていた。「ポタンフックが見当たらず。そのせいで、ブーツのボタンを閉じるのに、予想外の時間を要したのです。あなたは時間どおりにいらっしやっただけに」

「われわれはふだんから時間通りを心がけると」と、クリッチ氏は言った。

「私はいつも時間に遅れがちですが」と、バーキンが言った。「でも今日はほんとうに時間どおりに来ようとしたんですが、不測の事態のせいで遅れてしまいました。申し訳ございません」

二人の男は教会の中に姿を消し、しばらくのあいだ、外にいる人たちには見物するものがなくなった。アースラはそのままバーキンについて思いをめぐらせた。彼は彼女に反感を覚えさせると同時に彼女を引き付け、彼女をいらだたせた。

彼女は彼のことをもっと知りたかった。一度か二度、彼と話したことはあったが、視学官としての彼の職務との関係で話をしただけだった。自分と彼の間にはなにか似たところがある、自然にお互いをわかり合えるようなところ、同じ言葉で通じ合えるようなところがあるようで、彼もそれに気づいているように思えた。でも、これまでのところ、そのわかり合いを育てるための機会がなかった。なにかが彼女を彼に引き寄せると同時に彼女を彼から遠ざけた。彼のなかには人への敵意、秘められた究極の遠慮のようなものがあった。それが彼を冷たく、よそよそしく見せていた。

それでもなお、彼女は彼のことをもっと知りたかった。

「ルパート・バーキンをどう思う？」と、アースラはちよつと遠慮がちにグドランに聞いた。グドランは彼についてあれこれ言うのを好まなかった。

「ルパート・バーキンについてどう思うって？」と、グドランは相手の言葉をくりかえした。「すてきな人、間違いなくすてきな人と思ってる。でも、我慢できないのが、人と接するときの彼のやりかた。どんなに取るに足らない馬鹿にまで最大級の気遣いを見せちゃって。あれを見ると、自分がひどく安っぽく見られるように感じる」

「なんであの人はあんなのかしら？」と、アースラは言った。

「とにかくにも人を見分ける真の力がないの」と、グドランは言った。「どんな取るに足らない馬鹿に対しても、私やあなたに対するように接するの。それってひどく侮辱的なんだけど」

「そうね」と、アースラは言った。「人は区別を知らなくてはね」

「区別を知らなくてはならない」と、グドランは聞いた言葉をくりかえした。「でもね、それを抜きにしたなら、いい男よ。申し分のない人柄パーソナリティ。でも、信用できない」

「そうね」と、アースラはあいまいに言った。たとえ完全には同意見ではなくても、アースラはいつもグドランの言ったことに賛成しがちだった。

姉妹ふたりは静かに座り、結婚式の参列者一同が教会から出てくるのを待った。グドランはおしゃべりしなくなかった。ジェラルド・クリッチについて思いをめぐらせたかったから。さきほど彼から受けた強い印象がほんものかどうかを確かめたかった。彼女は覚悟を決めて彼が出てくるのを待ち構えていた。

教会内では結婚式が始まっていた。ハーミオン・ロデイスは、バーキンのことばかり考えていた。彼は彼女のそばに立っていた。彼女はじわじわと彼にじり寄っていくようだった。彼女は彼の体に触れるようにして立ちたかった。体が触れていないことには、彼がそばにいることに確信が持てなかったから。それでも結婚式の儀礼が続くあいだ、彼女はしおらしい様子でたずんでいた。

しばらく彼からほっておかれていたあいだ、彼女はひどく苦しんだので、いまでも彼女は頭がぼつとした状態にあった。いまなお彼女はそれによって神経をやられ、彼が彼女のもとから姿を消すのではないかという思いにさいなまれていた。ぼろぼろになった神経で淡い夢を抱きつつ彼にまた会うのを待っていたのである。彼女は物思いに沈んでたたずみつつ、顔にうっとりとした表情を浮かべ、それは霊的な、天使を思わせるものとも見えなくはなかったが、それは責め苦から生じたものだったから、その痛々しさを見て彼の心は気の毒な思いに引き裂かれた。彼女のうなだれた頭、うっとりした顔、ほとんど悪魔のような恍惚の表情を、彼は見た。彼の視線を感じて、彼女は顔を上げ、彼にもっと見つめられることを求め、きれいな灰色をしたおのれの目に大きな炎を燃やし、彼に信号を送った。しかし、彼は彼女の目を見るのを避けたので、彼女はしぶしぶと頭をうなだれ、心の痛みを噛みしめなお

した。彼のほうもまた、彼女の目を避けたこと、彼女がたいまつを燃やして送ってきた信号を受けようとしなかったことで、恥ずかしい思いとこのうえないいやな気持ち、それに彼女に対する哀れみで、心をさいなまれた。

新郎と新婦は祭礼によって結ばれ、参列者一同は付属部屋へと入った。ハーミオンは人混みのなかで押されたように装ってパーキンに体をくっつけた。そして彼はそれに耐えた。

教会の建物の外で、グドランとアースラは、自分たちの父親が演奏するオルガンに耳を傾けた。彼は結婚行進曲を弾くのを楽しみにしていたみたいだった。さあいま、新郎新婦が教会から出てくる！ 鐘が鳴り響き、空気を震わせた。木々や花々も振動を感じするものなら、それらはこの独特の空気の震えをどんなふうに取り取るだろうか、アースラは思った。新婦は新郎に腕を取られ、とてもおとなしくしていたが、新郎は目の前の空を見上げ、あたかもおれはいたいどこにいるんだというふうに、無意識に目を閉じたり開いたりしていた。おおぜいの人に囲まれて心をひどく動揺させつつも、目をぱちくりさせて、どうにか様になるように努めているその姿には、ややこっけいなところがあった。典型的な海軍士官、その任務にふさわしい男らしい男のように見えた。

パーキンがハーミオンといっしょに教会から出てきた。ハーミオンはパーキンの腕をつかみ、勝ち誇ってうっとりとした表情をしていた。名譽を回復した墮天使といったところだったが、どこかまだ悪魔的なところを残している。彼のほうはというと、あたかもそれを自分の運命として受け入れたかのように、彼女によって中性化され、乗っ取られ、表情を失っていた。

ジェラルド・クリッチが出てきた。たいへんなエネルギーを内に蓄えた金髪で見栄えがよく健康な男。まっすぐ背筋を伸ばし、立派に見えたが、その人好きのする、幸せそうといっているほどの外見の奥で、なにか秘密めいたものをぎらつかせていた。グドランは立ち上がり、その場を離れた。それ以上は見えていられなかった。彼女はひとりになった。鋭い針をもつていま身に受けて、自分の血の性質を一変させた、この不思議な接種のようなもの、それがいったい何なのかを、よく探ってみたかった。



ジェラルド・クリッチは、実在の人物。一族は勝手に名前が使われたことを恨み、ローレンス生誕百年の折にも取材陣に敷地内への立ち入りを許さなかった。

